

第2次世界大戦以降に発展してきた自由主義的な国際秩序は、今日、大きく動揺している。国際法の遵守、多国間協調、民主主義、人権の尊重といった根本的原則は、最も有力な国々によって公然と踏みじられているのだ。自由主義的国際秩序の動揺は、それを基盤に発展してきたジェンダー平等に関わる国際規範や制度にも重大な影響をおよぼしている。その一方で、自由主義秩序の下で推進されてきたジェンダー主流化政策に対しては、フェミニズムを擁護する側からも、歴史的植民地主義や新自由主義を十分に問題化しておらず、グローバルな西/北を頂点とする階層的秩序を再生産しているとの批判がなされてきた。

人権・自由・平等という規範の後退による深刻な帰結が懸念されるなか、これまでのジェンダー主流化に対する批判的議論を軽視することなく、グローバルな正義に向けた今後のジェンダー政治の展望を描いていくことはいかにして可能だろうか。こうした問題意識のもと、ジェンダー研究所は2025年11月に国際シンポジウムを開催した。本特集には同シンポジウムでの報告に基づく論考を収録している。

カタジーナ・イエジェルスカ (Katarzyna Jezierska) 氏は、グローバルなジェンダー主流化推進の手段として近年注目を集める「フェミニスト外交」に焦点をあてながら、自由主義的国際秩序とジェンダー主流化に関する「物語」の語られ方に再考を促している。自由主義国際秩序およびフェミニスト外交は、しばしばグローバルな西/北による発明として語られてきたが、そうした語りは、グローバルな南/東による重要な貢献を不可視化してしまうことになりかねない。主にラテンアメリカ諸国における創造的なフェミニスト外交の例を示しつつ、イエジェルスカ氏は、進歩派による批判が、右派の攻撃を助けて重要な原則の後退をもたらすことのないよう、「批判的な友人」というスタンスの重要性を強調している。

一方、武田宏子氏の論考が焦点を当てるのは、自由主義的国際秩序とその下でのジェンダー主流化に対するもうひとつの主要な批判である新自由主義である。新自由主義に深く埋め込まれた男性性の基準とともに、しばしばその対極として想像される家族こそが、家父長的な政治経済構造を不可視化しながらも再生産し、権威主義的統治をもたらしているという指摘は、日本の現状を理解するうえでも示唆に富む。「家族の廃止」というユートピア的構想は、新自由主義の暴力に抗して批判的な政治的想像力を切り開く試みなのである。

くわえて本特集には、スミタ・バス (Soumita Basu) 氏によるシンポジウム報告も特別寄稿として掲載した。「家族」というイメージを動員しながら既存の国際秩序に対するグローバルサウスからの挑戦を提示するインドの外交政策は、イエジェルスカ氏と武田氏の論考が提示するオルタナティブとは対照的である。これらの論考はみな、歴史的に形成されてきた国際秩序と国家のジェンダー政治を批判的に振り返りつつも、人びとの権利に対する重大な脅威に対して実践的に対応していくために、政治的想像力をはたらかせる必要を指し示している。本特集がさらなる議論のきっかけとなれば幸いである。